筑後市内遺跡群Ⅴ

福岡県筑後市大字若菜所在遺跡の調査
筑後市文化財調査報告書
第52集

2003

筑 後 市 教 育 委 員 会
（財）元興寺文化財研究所

筑後市内遺跡群V

若菜鞘ノ本遺跡第1次調査

若菜大堀遺跡第1次調査

若菜大堀遺跡第2次調査

2003

筑後市教育委員会
（財）元興寺文化財研究所

若葉輔ノ本遺跡出土平瓦（本文10・18p参照）

序

筑後市に文化財の専門員を配置したのが平成元年、以来切れ目なく発掘調査を実施しておりますが、本書に掲載した遺跡を調査いたしました平成6～8年度は、大規模な圃場整備事業をはじめとして、民間による開発工事も多数行われた時代と言えます。そのような中、体制も不十分ながら、なんとか現地調査をこなしてまいりましたが、現場を優先するあまり、出土資料の整理及び報告書の作成にまでなかなか手が及ばないと言う状況でありました。

そのような中、最近では毎年複数の報告書を刊行する努力をし、近年の調査に関しましては未刊のものが少数となり、専門書とは言え資料の公開を少しでも果たせたものと自負している次第であります。

しかしながら、最も多忙であった時代の資料が未刊のままであり、現在の業務との狭間で、順次刊行する計画をしておりますが、思うように進行していないのが現状です。

そこで今回の報告書は民間活力を導入し、きびしく監修を行いながら外部に委託するという形で刊行をめざしました。こうした方法は本市でははじめての試みでありますが、今後も遅れている報告書刊行に向けてさまざまな方法を模索し、試行錯誤しながらも進めて参りたいと考えております。

拙い冊子でありますが、本書が学術・研究分野はもとより、郷土史を考え、理解する資料として活用いただき、今後の文化財行政の発展に寄与できれば望外の喜びであります。

最後になりましたが、調査や整理に多大なご協力をいただきました関係者の皆様、並びに作業に参加していただきました方々に厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

筑後市教育委員会
教育長　牟田口和良

例　言

1. 本書は筑後市大字若菜所在の若菜鞘ノ本遺跡、若菜大堀遺跡（第1次、第2次）に関する発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は筑後市教育委員会が直営で行い、整理作業及び報告書の作成は（財）元興寺文化財研究所に委託して実施した。出土遺物のほか関連の図面や写真等の資料類はすべて筑後市教育委員会において所蔵・保管している。なお発掘調査及び整理作業の関係者は、Ⅰ．調査経過と組織に記したので参照されたい。
3. 本書に使用した方位は磁北（M.N.）である。
4. 発掘調査にかかわる遺構写真は若菜鞘ノ本遺跡を塚本英子（現：三潴町教育委員会）、若菜大堀遺跡（第1次、第2次）は田中剛、田中洋子が行い、遺物写真については狭川真一が撮影したが、巻頭のカラー写真は大久保治（元興寺文化財研究所情報資料室研究員）が撮影した。
5. 遺構実測図は若菜鞘ノ本遺跡を塚本、若菜大堀遺跡（第1次、第2次）は田中、田中が行い、遺物実測図は仲井光代が作成し、狭川が補足した。浄書は岡本広義が行った。
6. 本書の執筆はⅠを小林勇作、Ⅲ・Ⅳを狭川が行い、Ⅱは狭川が草稿を起こし、小林が補筆した。
7. 本書中における陶磁器の分類は、太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡XV』（太宰府市の文化財第49集）2000年　によった。
8. 本書の編集は小林が監修し、狭川が担当した。

目　次

Ⅰ．調査成果と組織 ―― 1

Ⅱ．位置と環境 ―― 3

Ⅲ．調査成果

1．若菜鞘ノ本遺跡第1次調査 ―― 4

2．若菜大堀遺跡第1次調査 ―― 11

3．若菜大堀遺跡第2次調査 ―― 16

Ⅳ．総　括 ―― 18

Ⅰ　調査成果と組織

平成6年2月に筑後市役所内の各課から、次年度に実施予定の公共工事が教育委員会社会教育課に提出された。このうちの建設経済部土木課から提出された「市道若葉鞘ノ本辻線道路改良工事」について、工事予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地内に該当することを通知するとともに、今後の文化財の取扱について協議を行った。その結果、該当する区域の内、緊急性の高い鞘ノ本地区に関しては平成6年度の早い段階で試掘確認調査を行い、その結果次第ですぐに本調査に入ることで合意した。

平成6年度に入り、上記の合意に基づいて試掘確認調査を行った結果、遺構の存在が確認され、緊急に記録保存の措置を講ずることを通知し、同年度内に本調査を実施した（若葉鞘ノ本遺跡）。

その後複数回の協議を重ね最終協議の中で、工事は今後西側に進展するが、その箇所にも遺構が存在する可能性が高いため、協議を密にしつつ、平成6～8年度の中で計画的に試掘確認調査及び本調査を行うことで合意した。平成6年度の若葉鞘ノ本遺跡を除く他の地点は、用地の買収が工事の前年度に行われることから買収完了後すぐに試掘確認調査を行い、その翌年度に本調査を実施するという計画となった。その結果、平成7年度には若葉大堀遺跡第1次調査を、翌平成8年度には若葉大堀遺跡第2次調査を実施することとなった。

調査組織

1）発掘調査及び整理作業

・平成6年度（1994年度）……若葉鞘ノ本遺跡

総　括	教育長	森田基之
	教育部長	津留忠義
庶　務	社会教育課長	下川雅晴
	社会教育係長	松永盛四郎
	社会教育係	永見秀徳
		小林勇作
		塚本映子（嘱託）（現：三潴町教育委員会）
		大島真一郎（調査補助員）（現：黒木町教育委員会）

・平成7年度（1995年度）……若葉大堀遺跡第1次調査

総　括	教育長	森田基之
	教育部長	津留忠義
庶　務	社会教育課長	下川雅晴（～9月30日）
		山口逸郎（10月1日～）
	社会教育係長	本村正晴
	社会教育係	永見秀徳
		小林勇作
		田中　剛
		塚本映子（嘱託）
		大島真一郎（嘱託）

・平成8年度（1996年度）……若葉大堀遺跡第2次調査

総　括	教育長	森田基之
	教育部長	津留忠義
庶　務	社会教育課長	山口逸郎
	社会教育係長	本村正晴
	社会教育係	永見秀徳
		小林勇作

田中　剛
柴田　剛（嘱託）

・平成14年度（2002年度）……整理作業

（筑後市教育委員会）

教育長	牟田口和良
教育部長	下川雅晴
社会教育課長	松永盛四郎
社会教育係長	成清平和
社会教育係	永見秀徳
	小林勇作
	上村英士
	柴田　剛（嘱託）
	立石真二（嘱託）

（元興寺文化財研究所）

理事長	辻村泰善
所　長	坪井清足
事務局長	奥洞二郎
研究部長	狭川真一
考古資料研究課長	尾崎　誠
考古学研究室長	**塚本敏夫**
考古学研究室	岡本広義（主任研究員）
	佐藤亜聖（研究員）
	江野朋子（研究員／土器等修復担当）

2）発掘調査参加者

地元有志

3）整理作業参加者（順不同、敬称略）

仲井光代　三谷幸恵　大西美奈

なお、調査及び整理にあたり次の方々、機関からご指導、ご教示を得た。記して感謝の意を表したい。
亀田修一（岡山理科大学）　花谷浩（奈良文化財研究所）　藤沢典彦（大谷女子大学）
高橋　章・小田和利（九州歴史資料館）　舟山良一・徳本洋一（大野城市教育委員会）
山村信榮（太宰府市教育委員会）

（順不同、敬称略）

写真1　若菜大堀遺跡第1次調査地点調査前

Fig.1 掲載遺跡一覧

1．久富縄打遺跡　2．熊野山ノ前遺跡　3．熊野屋敷遺跡　4．熊野塚根遺跡　5．熊野屋敷遺跡　6．久富鳥居遺跡　7．久富大門口遺跡　8．高江原口遺跡　9．前津中ノ玉遺跡　10．久富斗代遺跡　11．高江遺跡　12．高江キレト遺跡　13．久富市ノ玉遺跡　**14・15．若江大堀遺跡　16．若菜鞘ノ本遺跡**　17．若菜立萩遺跡　18．若菜田中前遺跡　19．羽犬塚寺ノ脇遺跡　20・21．羽犬塚中道遺跡　22・23．羽犬塚射場ノ本遺跡　24．徳久中牟田遺跡　25．山ノ井川口遺跡　26．若菜遺跡　27．若菜湖ノ江遺跡　28．長崎坊田遺跡

Ⅱ　位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部にあたる。市域をJR鹿児島本線と国道209号線が縦断し、国道442号線が横断する。また、市南西部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、瀧渡用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畑、東部や南西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は、国道に沿って市の中央部に形成されている。

若菜地区周辺の歴史的な環境をみると、主たる遺跡は筑後市街地の西側に位置した標高14m程度の低位段丘上に立地する。まず、指定文化財に目を向けてみると、当遺跡の北方約1.3kmに位置する板東寺（784年頃創建）の境内には、貞永元年（1232）銘の石造五重塔（県指定文化財）があり、筑後地方最古の在銘塔として著名である。また坂東寺の西側には同寺の鎮守社である熊野神社があり、その参道の放生池には石造眼鏡橋（県指定文化財）が架かる。元禄十丁丑年七月吉日（1697）の陰刻銘があり、県下で二番目に古い眼鏡橋である。更に、熊野神社では毎年1月5日に「鬼の修正会・追儺祭」（県指定文化財）が伝統行事として行われている。この他、民俗行事として指定を受けているのは、大字久富に所在する熊野神社において毎年8月14日に行われている「盆綱曳き」（県指定文化財）がある。施餓鬼行事の一種で、全身に煤を塗り、頭には荒縄の角、腰には締め縄を巻き、地区内を菰と藁で編んだ綱を引きながら駆け回るといった独特なものである。

次に当遺跡周辺の遺跡について概観すると、調査地の南西約300mの地点に若菜経塚がある（県指定文化財）。若菜八幡神社の丘から出土したと伝えられる滑石経が現在までに9個知られており、彎曲した滑石板の表面に罫線を引いて経文を記載したものである。またこの資料は9cm前後の小塔とともに出土したようで、その塔のひとつに「王平三年九月」の銘があり、「王平」は「壬平」と考え「仁平」と理解されている。つまり仁平三年＝1153年となる。

また当遺跡の北側には、中世から近世の溝が確認された久富綿打遺跡がある。この久富地区はかつて川が少なく農業用水が不足しており、久富村に在住していた中島安平らによって大規模な水路工事が享保年間（1716～1736）に行われ、「久富用水（四十八堀）」の名で知られている。工事は山ノ井川に井堰を設け、羽犬塚から久富までの約3kmの用水路を開削するといった大規模なもので、現在もその一部が使用され続けている。またそれに関連するとみられる遺構が久富綿打遺跡から検出されている。

さらに、南の丘陵からは縄文～近世の複合遺跡である若菜森坊遺跡が確認されている。

Fig.1　周辺遺跡分布図（1：25,000）

Ⅲ　調査の成果

若菜鞘ノ本遺跡
第1次調査

1．現況・層序など

調査原因は道路の拡幅にあり、調査前における当該道路の幅員はわずか3m弱。しかも未舗装という状態であった。道路の両側は主としてぶどう畑として利用されており、道路の南側には平行して走る溝状のくぼみが確認でき、現在でも水路として活用される時もあったようである。調査の結果、この溝状のくぼみの直下からこれとほぼ平行する溝遺構（1SD001）を検出した。

さて遺構面に至る層序だが、上記したように溝は埋没過程の途中段階と認識できるような状況であり（後述する若菜大堀遺跡でも同様の所見であり、且つ新しい時期の溝も確認している）、表土を除去すると黄白色砂質土の地山が顔を出し、遺構はそこから切り込んでいる状況であった。したがって層位による遺構、遺物の分別はできない。

Fig.2　若菜鞘ノ本遺跡調査位置図（1：5,000　筑後市都市計画図に加筆、縮小・上が北）

2．検出遺構

調査は、道路を挟んで南北両側にトレンチを設定する形で実施した。その結果北側のトレンチで確認したのはほとんどが現代の攪乱と思われるもので、報告に値する遺構はない。南側のトレンチは見事に一本の溝を狙ったかのような設定になり、その周囲に若干の遺構を確認することができた。しかしながら、検出した穴の多くは北側トレンチと同様に攪乱が多く含まれていた。

溝

1SD001（Fig.3・5、Pla.1～7）　現況道路の南側に平行して走る溝遺構で、東端に設定したトレンチ以外のすべての地点で確認できた。検出長124.5m（トレンチ未開削部を含む）、溝幅1.5～2.0m内外で調査区の東端約6m分は溝幅が拡大し、最大6mまでになる。ただし周辺の状況を加味するとこれより以東で溝は大きく南へ迂回するか、あるいは二条に分割する可能性が考えられ、溝幅の拡大はこうした現象によるものと理解したい。

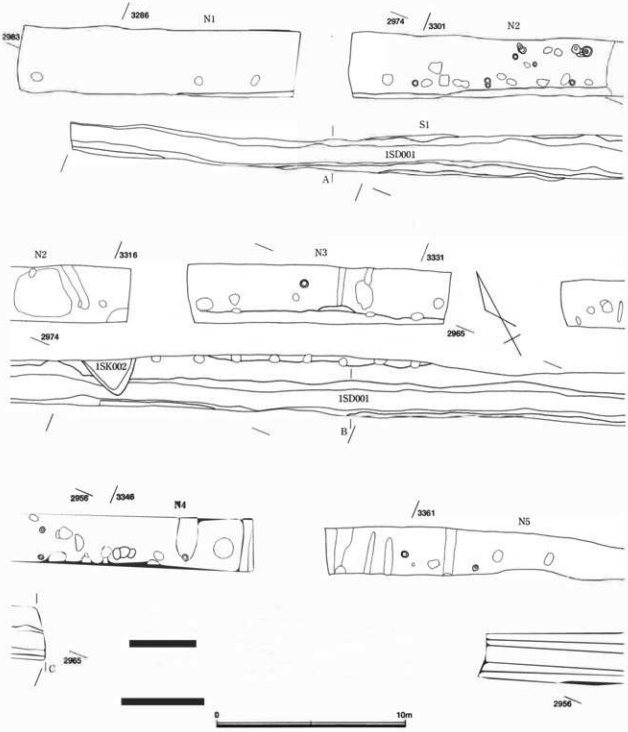


Fig.3　若葉鞘ノ本遺跡遺構配置図1（1：200）

溝の深さは0.25～0.5mほどで、埋没土は各位置で若干の異なりを見せるが、概ね粘性の強い土で埋まっており、早い流れを想定するのは困難である。なお遺物取り上げに際しては上位から順に1～V層の名称をつけて分層したが、随所で異なる堆積状況に必ずしもうまく合致するものではなく、相対的な堆積順を示すにすぎないことを付記しておく。

土坑

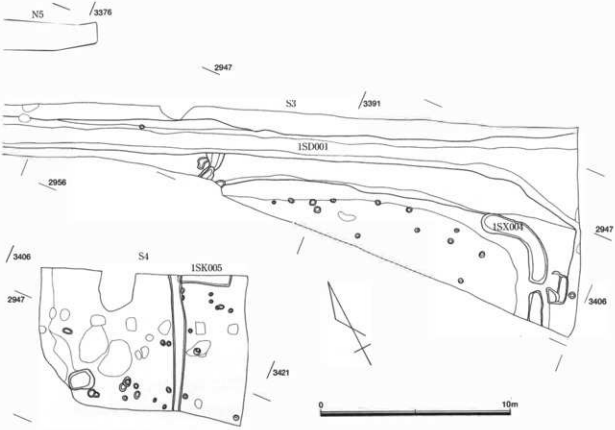


Fig.4　若菜鞘ノ本遺跡遺構配置図2（1：200）

Fig.5　1SD001・1SK005土層観察図（1：50）

1SK002（Fig.3）　南北1.9m以上、東西2.7m、深さ約0.2mの土坑で、北側は調査区の外にある。土坑の中央を攪乱によって破壊されており詳細は不明である。1SD001を切っているので構築時期はかなり新しいものと判断される。

1SK005（Fig4・5、Pla.7）　調査区東端で且つトレンチの北端に検出した土坑で、北側の多くが調査区の外にある。東西2.75m、南北0.55m以上、検出面からの深さ0.15mを測り、隅丸（長）方形と思われる。埋土は土坑床面に厚さ5cmほどのよくしまった層があり、その上位には土坑の東西両壁から流れ込んだ自然堆積と思われる土層が壁際に観察され、その後は土坑の両側から徐々に堆積した状況を示す。最下層を貼床と見なすと住居跡の堆積状況にきわめて類似していることに気づく。ここでは土坑で報告

するが、住居跡の可能性は高いと考えているが、出土遺物はなく時期決定は困難である。

その他の遺構

1SX004（Fig.4）　1SD001が南へ大きく迂回する付近にそれと平行するように検出された逆L字状の形状を呈する浅い溝状の遺構である。長さは5.2m（遺構心長）、幅0.8～1.0m、深さ約0.35mを測る。調査区内の状況は1SD001に平行して溝の南側2.5m付近から段落ち状になっており、その落ち際に穿たれた遺構と見なされる。用途は明らかでないが、1SD001を意識したものと考えたい。

3．出土遺物

1SD001第I層出土遺物（Fig.6、Pla.8～11）

須恵器

蓋c3（1）　口径17.2cm、現存器高2.0cmを測る。天井部は回転ヘラケズリされる。

瓦器

椀c（2）　口径16.6cm、器高5.8cm、高台径5.4cmを測る。全体に風化が進行し調整は明らかでないが、口縁部外面にヨコナデ、内面には強めの擦痕が観察できるのでヘラミガキが施されていたと考えられる。体部外面にはかすかに指オサエの痕跡が確認できる。

瓦質土器

羽釜（3）　口縁部はないが、鍔部分の径24.6cmを測る。体部は粗い縦方向のハケ目が残るが、鍔の取り付け部分は指オサエによって消滅する。内面はナデである。

火舎（4・5）　4は、口縁部を失うもので、頸部の径16.7cm。肩部と頸部の境目に小さな突帯が巡る。ほぼ直立する頸部の外面は縦方向のハケ目、肩部外面はヘラミガキで光沢がある。内面は横方向のハケ目が残る。5は小片で口径の復元は困難。口縁端部を平坦に作り、内外面ともに細かなハケ目が観察できる。口縁部の下位に円形とみられる透孔があるが規模や正確な形状は不明である。

白磁

椀（6・7）　6は口径17.0cmで、端部をやや厚めに作る。体部内面にはヘラによる文様を施す。釉は残存部の内面全面と外面は体部下位以上に施され、発色は悪く、黄灰褐色を呈し、光沢はほとんどない。V-2類で捉えたい。7は高台径5.6cm。釉は内面に見られ、淡青灰色に発色するが、見込みの釉を幅約2.2cmの範囲で輪状に掻き取る。外面は施釉されない。高台畳付は使用による摩耗が進む。VIII-2または3類。

染付

小椀（8～10）　8は高台径4.0cm。文様は外面にのみ見られる。釉は透明なもので光沢があり、畳付を除いて施される。9は口径10.2cm、器高6.5cm、高台径4.3cm。外面に文様があり、釉は全面にかかる。全面に貫入が認められる。高台内面に砂粒が多く付着している。10は高台径4.0cm。外面に文様があり、釉は畳付付近を除く全面に施され、透明で光沢があるが貫入もみえる。畳付は露胎で、高台の両側面には砂粒が付着している。

椀（12）　高台径6.0cm。文様は内外面ともに存在するが具体的にはわからない。見込みには目跡と思われる円形の小突起が3箇所観察される。釉は透明なもので光沢があり、畳付部分のみ拭き取っているらしい。高台畳付の外面側端部は長さ1cm前後、幅1mmほどの欠損部が並んでおり、焼成時にかかる欠損と思われる。

皿（11）　器形や規模は不明。見込みに振り向く鹿の絵が描かれる。内外面ともに施釉され、釉は光沢がある透明なものである。

石製品

鍋（13）　滑石製で、口径23.4cmを測る。鍔の先端と体部を失い。口縁部はやや外面に傾斜するように作り、調整は全面ヘラケズリで仕上げる。口縁部周辺には煤が付着する。

砥石（14）　長さ3.3cm、幅3.1cm、厚さ0.5cmで、黒褐色を呈し、表裏両面及び細い側面が研磨され

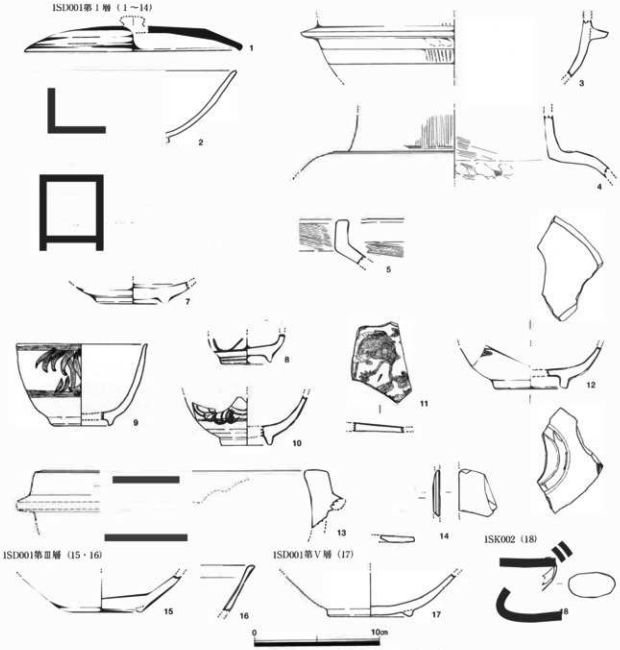


Fig.6　1SD001・1SK002出土遺物実測図（1：3）

る。

1SD001第Ⅲ層出土遺物（Fig.6、Pla.11）

瓦器

椀c（15）　高台径6.4cm。調整は風化のため観察できないが、底部の丸味は押し出し技法によるものと推定される。

白磁

椀（16）　釉は淡く灰色味を帯びた透明なもので、光沢がある。V-4-a類。

1SD001第Ⅴ層出土遺物（Fig.6、Pla.12）

瓦器

椀c（17）　高台径7.4cm。調整は風化のため観察できないが、底部の丸味は押し出し技法によるもの

Fig.7　表土ほか出土遺物実測図（1：3）

と推定される。

1SK002出土遺物（Fig.6、Pla.12）

土師器

把手（18）　器表面に突出した部分の長さ4.5cm、幅3.8cm、厚さ2.0cmで、表面は強めのナデやユビオサエによって仕上げる。土器への取り付けは把手基部に円柱状の突起（長さ約1cm、径1.5cm程度か）を作り、それを差し込んだのち器表面をナデあげて接着する。

表土等出土遺物（Fig.7、Pla.12～15）

須恵器

鉢（1）　東播系。口縁部はヨコナデ、内面は上位以下はナデである。口縁部外面には自然釉が見られ、暗灰黒色を呈している。

瓦質土器

火舎（2・3）　2は口縁部外面に4条の沈線を入れ、連続した突帯状に見せる。上位から2段目を幅広く窪ませ、そこに十一弁の菊花紋のスタンプを連続して押捺する。内面は横方向のハケ目で仕上げる。暗橙色で硬質に焼成される。3は口縁端部を肥大化し、その外面に細い沈線を巡らし、上面は工具状のものを用いた粗いヨコナデで平坦にする。胎土はやや大粒の砂粒を含む粗めのものである。

白磁

椀（4）　高い台形を呈する高台は径5.5cm。内外面ともに施釉され、釉は乳褐色の透明なもので貫入が目立つ。また焼成がやや甘めで釉の剥離もみられる。見込みには1.0×1.5cmほどの暗白色の目跡があり、畳付には3箇所が残る。内外面との当初は4箇所にあり対応していたと思われる。

瓦

平瓦（5）　現存長33.7cm、残存幅17.3cm、厚さ1.3cm内外を測る薄いもので、暗橙色を呈して硬質に焼成される。凸面は長軸に直交もしくはやや斜め方向に叩きを施す。叩きは幅2.5cm前後、長さ5cm程度で6～7条のやや湾曲する平行沈線（木目と思われる）で構成され、端部付近ではハケ目も観察される。凹面はほぼ全体におよそ6cm×6cmで略隅丸方形状の浅い窪みが連続して並んでおり、当て具痕と考えられる。ただしその後にナデを行っており、当て具の文様は観察できないが、当初から無文の可能性が強い。残存する端部は広端部とみられ、ヨコナデで調整され、凹凸両面とも端部から数cmの範囲にまでヨコナデが及んでいる。側縁部はヘラによる分割線を凸面側から切り込み、その深さは0.5cm前後である。切り込む以前に細い縦線（分割截線）を入れて切り込みの目安としている。残りは破断面となるがやや粗いヘラケズリで簡易に調整され、さらに内側との稜は軽く面取りが施される。以上のことから円筒状に製作したものを3～4つに分割する桶巻作りの技法を想定させるが、凹面に模骨痕は観察できない。また布目も見えない。なお凹面は側縁部から5～6cm以内、広端部から約23cm以内の範囲が著しく風化しており、風食痕と認定できる。完存しないものの平瓦の重複率はおよそ50%程度であったと思われる。撹乱中から出土。

土製品

人形（Pla.15-b・c）　「美人もの」と言われる博多人形で、量産されたタイプと考えられる。上半身を失っているが、現存長20.0cm、最下端での幅12.3cmを測る。細身で腰をくねらすような造形で、右足をやや前に踏み出すような姿に作る。前後２面からなる型で作られ、内面は粘土紐を支持土として下側から押圧を加えているのに対して、表面は接合痕を観察できないほど丁寧に仕上げられている。背中部分には別型で作られる帯を貼り付けた跡が残る。また袂も別作りで貼り付けたらしい。底部は粘土板を当てて伏せるが、中程に直径5mmの穿孔を作る。胎土は精良で、淡茶白色を呈する。明治後期から大正期に多く作られたもので、一部戦後まで生産されていたものという。他に同一個体とみられる肩部の破片（c）や袂の破片がある。

4．小結

1SD001の年代を検討し小結とする。瓦の問題は第Ⅳ章で行う。さて、相対的な層位だがここに示したⅢ～Ⅴ層は、出土遺物の状況から13世紀代にまで遡る可能性がある。少なくとも白磁椀Ⅴ類は11世紀末～12世紀前半には姿を現す資料であり、瓦器椀は摩耗が進むものの13世紀代に収まると考えられる。これに対してⅠ・Ⅱ層はきわめて新しい遺物を多量に含んでいる。陶磁器類は近世以降の染付が目立ち、他の陶器類も同様の時期と見なされる。ところが、先の瓦器椀からこの染付までは時期的に大きな開きを認めざるを得ないので、実際にこの溝が時間的に連続して機能していたのか少々疑問である。たしかにその中間にはまるような遺物もないではないが、安定した状況とは言えない。こまめな浚渫（しゅんせつ）行為が行われていたと考えておくのが妥当であろう。

他の遺構は時期決定が困難であるが。1SX004は本文中でも指摘したとおり、1SD001に関係すると思われるが古く遡るものではなさそうである。また遺物のみだが後述の瓦のほか、古いものでは8世紀末の須恵器があり、周辺に当該期の遺構の存在を予測させる。

若菜大堀遺跡
第1次調査

1. 現況・層序など

先述の若菜鞘ノ本遺跡の西側隣接地を調査した。事業としては一連のものであり、検出された遺構もきわめて類似している。調査前の現状も同様だが、井戸やアンカーが多く見え、調査区の一部にもその井戸がかかる。これは数十年前にぶどう畑に利用するため人力で掘削されたものという。また聞き取りの成果ではぶどう畑にする前にはハゼの並木になっていたらしい。

さて、遺構は表土の埋没に連続して観察されるもの（1SD001）があり、それを除去すると黄白色砂質土の地山が顔をだし、そこに遺構が穿たれている。若菜鞘ノ本遺跡の南側に設定したトレンチと同様に、トレンチの幅に見事に溝遺構がはまっている状況であり、他の遺構についてはほとんど検出できていない。

Fig.8　若菜大堀遺跡調査位置図（1：5,000　筑後市都市計画図に加筆、縮小・上が北）

2. 検出遺構

トレンチの中央に大きな溝を検出した他は顕著な遺構は確認できなかった。また上位から穿たれる新規の井戸やその他の撹乱によって遺構を失う部分もある。

溝

1SD001（Fig.9・10、Pla.16～19）　土層図が語るとおり最近まで開いていた溝である。堆積土は周囲に堆積する表土と同類のものであり、この近辺を整地した折りにいっしょに埋めたと考えられる。おそらくその行為に伴ってこの溝の直上に上管を埋め込んでいる。土管周囲の撹乱および土管の記録のない場合でもバラスを混ぜる撹乱の表記はこれを物語る。したがってきわめて新規の遺構であると認識する。遺物もそれを直接物語り、古い資料も混じるが主として近代から現代のものまでが混在する。また若菜鞘ノ本遺跡においても調査前に観察された溝状のくぼみはこの遺構の延長上に該当するものと判断できる。

1SD002（Fig.9・10、Pla.16～19）　1SD001を除去するとその南側にややずれる形で類似した規模の溝が検出された。この溝はトレンチに合わせるかのように平行して走り、検出長104mに及ぶ。地点によ

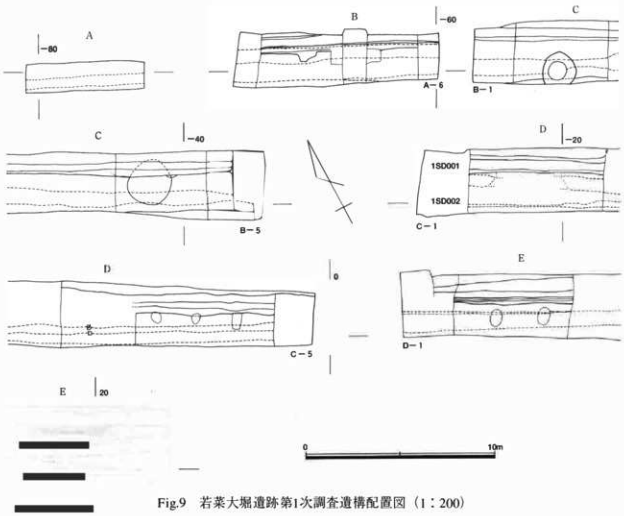


Fig.9　若菜大堀遺跡第1次調査遺構配置図（1：200）

ってはトレンチより幅が広く全貌を掴めない部分もあった。また1SD001によって北側の肩を失っているので確実な溝幅は押さえられないが、確認できる範囲ではその幅は約2m前後あったらしい。また深さは地点によって異なるが、0.4～0.75m程度を測るものである。堆積土はすべて粘性が強めであり、早い流れは観察できない。また地点によって様々に異なるが、遺物取り上げに際しては1～IV層に便宜上分層して取り上げた。したがって遺物の報告に伴う層位は相対的なものと理解されたい。

3．出土遺物

1SD002第I層出土遺物（Fig.11、Pla.20・21）

須恵器

鉢（1）　東播系。内面上位以下はナデ、口縁部外面には自然釉がかかり暗灰色を呈し、光沢がある。

瓦質土器

鉢（2）　外面は格子目叩き、内面は斜め及び横方向のハケ目である。底部外面は未調整。内外面共に黒灰色を呈している。

白磁

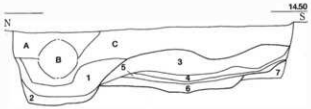
小皿（3）　口径4.6cm、器高1.3cm、高台径2.3cmを測る。畳付の一部に釉がかからない他は全面に施され、青色味を帯びた白色に発色し光沢もある。

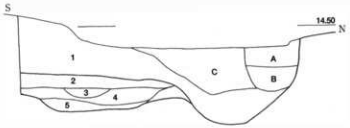
陶器

椀（4・5）　4は、唐津焼。高台径4.8cmで、畳付は露胎である。釉は内外面共に施され、淡緑褐色に

B－１地点土層
A　暗茶色砂質土（かなり締まっている。植物根あり。）
1．濃黒灰色粘質土（３mm－５mm大の茶褐色〔酸化鉄〕の粒子を多く含む。粘性は強い。）
2．明茶色粘質土（１mm－３mm大の黄茶色粒子を多く含む。締まっている。）
3．暗黄茶色粘質土（茶色土混入。〔１からの落ち込みか？植物根の浸食によるものか？〕）
4．淡黒茶色粘質土（１mm－３mm大の茶褐色〔酸化鉄〕を多く含む。粘性がもっとも強い。）

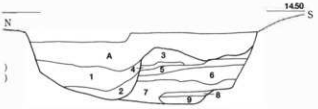
B－５地点土層
A　バラス
B　カクラン（土管）
C　表土
1．黒灰色粘質土
2．暗黒灰色粘質土
3．明茶色粘質土（１mm－３mm大の黄茶色粒子を多く含む。）
4．暗黄茶色粘質土（２cm大の黄茶色ブロックを少し含む。）
5．濃黒茶色粘質土
6．黄茶色粘質土（５cm大の礫を多く含む。）
7．黄白色砂質土（〔礫層〕・茶褐色〔酸化鉄〕）

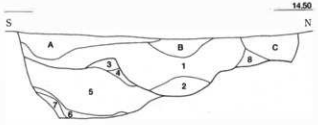




C－１地点土層
A　バラス
B　カクラン（土管）
C　表土
1．濃黒灰色粘質土
2．明茶色粘質土（１mm－３mm大の黄茶色粒子を多く含む。）
3．暗黄茶色粘質土（２cm大の黄茶色ブロックを少し含む。）
4．濃黒茶色粘質土
5．黄茶色粘質土（５cm大の礫を多く含む。）

C－５地点土層
A　表土
1．濃黒灰色土（茶褐色の粒子を含む。）
2．淡黒灰色土
3．濃黒灰色粘質土
4．黒灰色粘質土
5．淡黒灰色粘質土
6．明茶色粘質土（１mm－３mm大の黄茶色粒子を多く含む。）
7．暗黄茶色粘質土（２cm大の黄茶色ブロックを少し含む。）
8．濃黒茶色粘質土
9．黄茶色粘質土（５cm大の礫を多く含む。）





D－１地点土層
A～C　カクラン
1．茶色粘質土
2．暗茶色粘質土（３mm－５mm大の濃黄色土を少し含む。）
3．暗茶褐色粘質土（黄茶色粒子および黒色粒子を少し含む。）
4．茶褐色粘質土
5．黄茶色粘質土（茶色土が多く混入。）
6．暗黄茶色粘質土（炭を少し含む。）
7．暗黄茶色砂質土（黄茶色粘土のブロックを含む。）
8．礫層

D－６地点土層
A～E　表土及びカクラン土
1．暗茶色粘質土
2．淡茶色粘質土（黄茶色粘土〔地山①か？〕のブロックを多く含む。）
3．暗淡茶色粘質土（５mm－１cm大の黄茶色土を多く含む。）
4．淡茶色粘質土（0.5cm茶色土ブロック混入。）
5．黄茶色粘質土（茶色土が少し混入。）
6．茶褐色粘質土
7．暗茶褐色粘質土

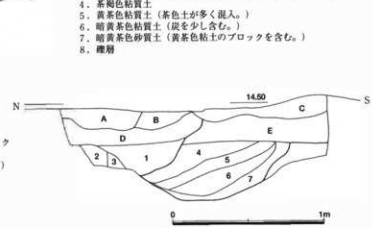


Fig.10　溝遺構土層観察図（1：50）

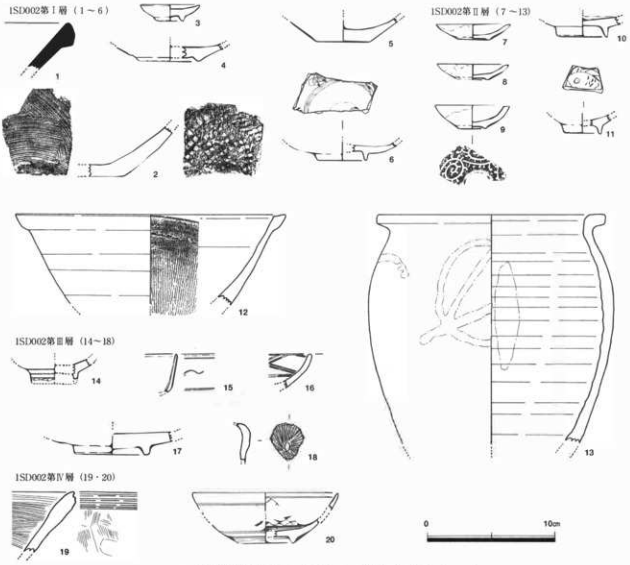


Fig.11　若菜大堀遺跡第1次調査出土遺物実測図（1：3）

発色し、光沢があるが貫入も目立つ。見込みには1箇所目跡と見られる付着物がある。また高台内側は白褐色粒が多量に付着している。5は底径4.2cm。底部は回転糸切りされ、内面は施釉され、暗茶褐色に発色し白濁色の斑点が多数観察できる。胎土は暗赤褐色を呈している。

染付

椀（6）　高台糸4.0cm。内面と見込みに文様を描くが、見込みは幅1.5cmで輪状に掻き取られる。文様はそれを意識した図柄らしい。釉は畳付と掻き取り部分を除いて施され、青色味を帯びた透明なものである。なお畳付は露胎で使用による摩耗が進んでいる。

1SD002第Ⅱ層出土遺物（Fig.11、Pla.21～23）

白磁

紅皿（7～9）　7は口径5.8cm、器高1.2cm、高台径2.5cmを測る。釉は薄い緑灰色味を帯びた白色に発色するもので、内面は全面に施されるが、外面は部分的に露体である。全体は型による成形で、口縁端部はきわめて鋭利になるところがあり、型から離して特に丸めるなどの行為を行っていないようである。8は口径5.6cm、器高1.2cm、高台径2.4cm。釉の発色にわずかな違いがあるが7とほとんど変わりない。おそらく同じ型による成形と思われる。9は口径5.8cm、器高1.8cm、底径2.0cmを測る。外面に蜻唐草の印刻文がある。これも外型による成形とみられる。釉は黄灰色味を帯びた白色に発色し、内面では全面

に施されるが、外面は一部にかかる程度でほとんどが露体である。胎土は淡褐色を呈している。

染付

椀（10）　高台径4.0cm。小片のため文様は定かでないが、高台外面に呉須が飛散しており染付であることはわかる。釉は青色味を帯びた透明なもので、光沢があり貫入は見えない。見込みは1.3cm幅で輪状に掻き取っており、高台畳付も拭き取っている。

色絵磁器

小椀（11）　高台径3.0cm。外面に赤色の文様、見込みには鯉の絵を薄い藤色と黒色で描く。畳付は施釉されず、細かい砂粒が付着する。

陶器

擂鉢（12）　口径21.0cm。内面上位以下に櫛による卸目が施される。調整の基本はヨコナデだが、外面下半には回転ヘラケズリが施される。釉は全面に薄くかかり、暗茶褐色に発色し鈍い光沢がある。

甕（13）　口径17.8cm。ほぼ全面に明茶褐色の釉をかけ、外面肩部から体部にかけて白濁色の釉で施文するが、その内容は不明である。

1SD002第III層出土遺物（Fig.11、Pla.23・24.）

染付

小椀（14・15）　14は高台端部を打ち欠いている資料である。釉は残存部の全面にかかり、青味を帯びた透明なもので、光沢があり、見込み部分に貫入が見られる。15は外面に文様が見え、釉は口縁端部で拭き取るほかは全面に施される。

皿（16）　内面に文様がある。釉は全面にみられ、青灰色味を帯びた透明なものである。

青磁

椀（17）　高台径6.0cm。釉は暗緑灰色に発色するが、見込みでは径5.8cmの範囲を円盤状に掻き取り、高台畳付以内にはかからない。

土製品

人形（18）　大黒天の乗る俵の小口部分と思われる。素焼きで外型による成形で、内面には強いナデのあとがある。現存長2.9cm、現存幅2.7cm、厚さ0.6cm内外である。

1SD002第IV層出土遺物（Fig.11、Pla.24・25）

土師器

鉢（19）　口縁端部外面を3条の沈線を巡らす。体部の外面は粗い縦方向のハケ目ののちナデを施す。内面は横方向のハケ目である。

染付

椀（20）　口縁端部は出土地点を同じくする小片を同一個体と認識したにすぎないため、口径を11.4cmに復元したもののきわめて不安定な数値である。データとして下半部のものが有効であり、高台径4.6cm。文様は内外面ともにあり、釉は青色味を帯びた透明釉で、高台畳付は拭き取っている。

4．小結

検出した遺構は溝2条にほぼ限られると言ってよい。そのうち1SD001は近現代までその埋没は下る。その下層に存在する1SD002だが、数層に分層して遺物を抽出したにも関わらず、上下の層で顕著な差を見出すまでには至らなかった。特に第II層では施文をプリントで行う磁器（Pla.23-a）があり、1SD001開削直前まで利用されていたことが理解できるし、この時期が1SD001の上限とも言えよう。しかし最下層にはこうした極度に新しい遺物はなく、概ね中世末期から近世の範囲にとどまる。

さて連続して調査した若菜鞘ノ本遺跡との関連を考えねばならないが、1SD002と鞘ノ本1SD001がその上層に関しては近しいものがあり、規模やその連続性を含めると同じものと認識して差し支えなかろう。しかし、遺構の上限の時期に大きな隔たりがあり問題も残るが、ここでは浚渫が行き届いていたと見なすこととしたい。

若菜大堀遺跡
第2次調査

1. 現況・層序など

地表から50cm程度は現在の表土であり、それを除去すると地山が顔を出し、そこが遺構面となっている。地山は赤茶色粘質土だが、溝底付近（標高12.7m内外）以下は砂礫層となる。

さて、遺構は第1次調査と類似した状況にあり、トレンチにちょうど当てはまるように略東西方向の溝2条を検出した。これ以外に顕著な遺構は見出せなかった。

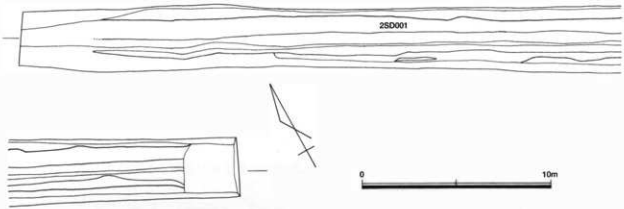


Fig.12　若菜大堀遺跡第2次調査遺構配置図（1：200）

2. 検出遺構

溝

2SD001（Fig.12・13、Pla.26）　検出長17.4m、幅1.75m前後、深さ0.55mを測る。埋土は大きく2層に分かれるが、その多くは黒茶色粘質土層で、薄い最下層は粘性がきわめて強いものである。2SD002を切っている。遺物は桟瓦やきわめて新しい陶器類を含んでいる。

2SD002　検出長17.4m、深さ0.55m前後だが、幅は2SD001に北側の肩を破壊されていて正確な規模はつかめない。ただその南壁の傾斜などから推定すると2SD001とほぼ同様の規模であったと思われる。埋土は残存する範囲では地山の土を混在する黒茶色粘土層である。出土遺物はない。

写真2　若菜大堀遺跡2SD001土層観察

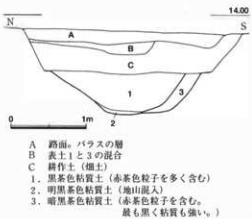


Fig.13　2SD001土層観察図（1：50）

3. 出土遺物

2SD001出土遺物（Fig.14、Pla.25）

陶器

皿（1）　唐津焼の皿とみられる。低めの蛇の目高台でその径は4.6cmを測る。内外面ともに施釉され、釉は緑灰色に発色し鈍い光沢がある。畳付には大きな目跡が2箇所残っている。胎土は黒色粒子を多く含む粗めのものである。

染付

椀（2）　高台径5.4cm。文様は内面体部と見込みにあり、灰青色味を帯びた透明な釉は内外面ともに施される。見込みでは1.7cm幅で釉を輪状に掻き取るが、それを意識した文様配置と思われる。また掻き取って露胎となった部分は黄白濁色を呈している。畳付も釉を拭き取り、小さいが3箇所の目跡が観察される。

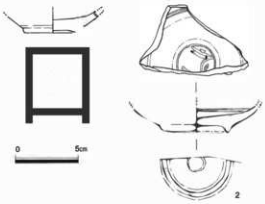


Fig.14　第2次調査出土遺物実測図（1：3）

4. 小結

検出したのは溝2条にとどまる。これらはその重複の状態から、第1次調査で確認した1SD001・002の延長にあると判断できる。2SD001は出土遺物が少ないこと、これより古い遺構がないこと等から掘削年代は明確にできないが、埋没は近代以降まで下る。2SD002は年代の決め手を欠くが、状況から第1次調査1SD002の延長と判断したい。

Ⅳ 総 括

(1) 溝について

ぶどう畑の中を貫通する細い農道に沿って、長いトレンチを設定したわけだが、いずれの調査もその道に沿う形で検出された略東西方向の溝遺構が主体である。若葉大堀遺跡第1次調査においては確実に2条の溝として認識したが、上位のものは現代まで連続するものであり、それ以前の1SD002を掘り直したものと理解して問題なかろう。その1SD002は西側で2SD001として調査したものと連続し、東側では若葉鞘ノ本遺跡1SD001として報告したものと連続する。これらはすべて一連のものとして理解して差し支えない。したがって今次の調査では総延長約270mを調査したことになる。

さてこの年代と性格だが、これまで報告してきたとおり埋没はきわめて新しく近代まで下る可能性がある。溝の主体をなす遺物群も概ね近世に考えられるものであり、溝が活用されていた時代の中心は近世におかれよう。しかし、若葉鞘ノ本遺跡1SD001の所見ではその最も古期に属する堆積層（III～V層）から出土した遺物は概ね中世であり、いま少し絞り込むならば13世紀の範囲内で捉えられるものである。このことは一連の溝の開削時期をこの段階まで遡らせる可能性を示唆するものである。

さてその性格を考える必要があるが、やはり今回設定したトレンチに沿って道路が存在することに注意する必要があろう。今回検出した一連の溝は道路の側溝という理解はできないが、何らかの区画を示す溝であったことは理解できよう。しかも単なる区画ではなく立派に水路としての役割を果たしている。しかし、その開削から埋没までの長い年代の割には中間の時期の出土遺物が少なく、各時期ごとに丁寧な浚渫が行われていたことを窺わせる。したがって溝に沿って常々水路の管理者が往来できる環境が整備されてきたと思われ、そこが次第に管理用の小道として発達し現代に至ったのではなかろうか。

このように理解すると、周辺における類似する道路の存在は、同様の区画溝＝水路が存在する可能性を示唆する。しかしこの付近には条里の痕跡はなく積極的な復元は困難である。ただ北側の浅い谷地形を隔てた地点には久富綿打遺跡が調査されており、13世紀代とみられる水路が確認されている。その位置から「久富用水」（18世紀前半）として後世にも活用されていたと考えられており、それは近年まで機能していたことがわかっている。用水の設定は近世ながら、その基盤となる水路の開削は中世に遡るようである。この状況から今次の調査と久富綿打遺跡の状況を比較すると、同時とは言えないまでもその開削の時期はいずれも中世に遡り、中世前半から中頃にかけてこの地域の水路整備＝水田開発が行われたことを示唆する。しかもそれはごく最近の開発による埋没まで生き続けているのであり、この地域の環境がごく最近まで中世中頃以降の景観に近いものを伝えていた可能性が考えられる。

なお、現在はこの小道が大字若葉と久富の境になっている。このことも重要な所見であり、今後の検討材料となろう。

少ない調査所見からあまりに大風呂敷を広げることは躊躇しなければならないが、一定地域の全面を発掘するのは至難の業であり、こうした発掘結果を地理的観察の結果に融合させる形でより広い範囲の歴史的、地理的理解に結びつけたいと考える。発掘調査はその作業のきわめて重要な一部なのである。

(2) 瓦について

若葉鞘ノ本遺跡の撹乱中から出土した薄手の平瓦は、その製作技法や調整方法等に一般的な瓦の技法とは異なるものが見出される。本文と重複するが以下にその特色を列記する。

・凸面は叩き調整される。叩き目は木目と思われる。
・凹面には無文の当て具痕と見られる窪みを認めるが、模骨痕は観察できない。また布目も見えない。
・円筒状に製作し、外面（凸面）から切り込みを入れて分割する。
・分割後の破断面はヘラケズリで面取りされている。
・厚さが1.5cmと薄く、暗橙色（赤褐色）でやや硬質に焼成される。

などである。こうした特徴のすべてを認める類例は知見にない。一部で共通する要素を有するものに、

大野城市月ノ浦窯跡及び小田浦窯跡出土資料がある。月ノ浦例は軒丸瓦や鴟尾が出土したことで著名だが、凸面叩き目で端部をナデ等で調整する点が共通項目としてあげられるものの、凹面は模骨痕と布目が観察され、明らかな桶巻き造りである。小田浦例は完存する平瓦があり、凸面がナデやヨコナデ、一部ヘラケズリされ、凹面はヨコナデである。端部の調整や形状にも類似するものを認めるが、完全に一致するものではなく、大きさも異なっている。また分割を内側から行う点も異なっている。一部を記したにとどまるが、大野城市例と比較した結果では共通項目の方が少なく、しかも生産地と消費地という違いはあるが、今次の事例は技法こそ特異なものの瓦として完成品に近づいているものであり、厚さも部位によって異なることなくほぼ安定しており丁寧に作られている。

次に凸面から切り込みを入れる例は、大分県伊藤田窯跡群中の踊ヶ迫窯跡からの出土が知られるのみである。ただし踊ヶ迫例は外面が同心円文の当て具を叩き具として使用したようであり、凸面には顕著にその痕跡が観察され、凹面は模骨痕と布目が明瞭に見えている。この点から今次の出土瓦と比較すると分割方法のみの類似であり、それ以外の点で両者の共通性を見出すのは難しい。また凸面分割の事例は朝鮮半島の高句麗平壌府内出土瓦に事例が知られるが、分割方法以外では凹面が模骨痕、布目、糸切り痕、凸面が板状の叩き痕となっている。この部分では共通性に乏しい。

また無文の当て具という観点からみると、日本では弥生時代末にその事例を見出して以降、中世まで散見するが、陶邑や播磨出合遺跡の例のように初期須恵器や軟質系土器に事例があり、朝鮮半島との関連も指摘されている。ここでは瓦自体の年代や産地を特定できないので比較する観点を絞れないが、古い段階の須恵器窯にみられること、朝鮮半島との関連を考え得ること等の点は注目しておきたい。

いくつかの事例を見たが、年代の点ではやはり7世紀代を考えたい。しかもその技法は初期的な事例に類似するものが多く、前半に近い段階を想定することが可能かもしれない。またその技法や無文当て具の存在を踏まえると、朝鮮半島との関係が浮上してくるところである。残念ながら高句麗の出土例を詳細に観察する機会がないので現段階ではコメントできないが、半島と関係の深い者による生産を窺わせる事例とみることは許されよう。

ところで、九州における初期瓦の例は豊前の一部と筑前地方に分布の中心が知られている。このうち筑前の事例を見ると、太宰府市、大野城市といった福岡平野の奥まった地域ではすべて窯出土資料であり、そこが生産地であったと理解できる。これに対して消費地遺跡は福岡市那珂遺跡が著名である。那珂遺跡は6世紀代に首長墳が築造され、7世紀に入ると大型掘立柱建物の建造が行われている。隣接する比恵遺跡は那津官家にも推定されるなど、福岡平野のなかでも際だった性格を有している。おそらく生産地である牛頸窯跡群一帯を掌握する大きな勢力の存在がこうした比恵・那珂両遺跡の住人であっただろう。そうした中でこの特殊な瓦が消費されるわけであり、九州における初期瓦の需要層を想定する資料を提供してきた。しかし今回の資料は筑後平野での発見であり、これまでの成果のみでは単純に理解することができない。しかも注目すべきことは風食痕が明瞭であるということである。その痕跡は本瓦葺による使用を想定させるものであり、実際に建物に使用されていたことは明らかである。

筑後地方の7世紀は、御原郡一帯にその中枢があったと思われ、今次の資料との結びつきは想像すらできない。新たな一例を加えることができたのは重要だが、類似した時期の出土遺物が当該調査地点では皆無であることも問題である。その性格を考えるには周辺部の詳細な調査を行うほかに手段はないだろう。今後の調査に期待したい。

(参考文献)

舟山良一「牛頸月ノ浦窯跡群」(大野城市文化財調査報告書第39集) 1993年 大野城市教育委員会

菅波正人「那珂10」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第365集) 1994年 福岡市教育委員会

村上久和・吉田寛・宮本工「豊前における初期瓦の一様相」『古文化談叢』第18集 1987年 九州古文化研究会

亀田修一「陶製無文当て具小考」『生産と流通の考古学』(横山浩一先生退官記念論文集I) 1989年

※追記(奥付ページの上半部)参照

※この資料を認識したことにより、2001年に報告した鴻田西ヲ ヶ池遺跡SX074出土の平瓦も分割方法や調整、色調、厚さ等が今次の資料と共通するものであることを確認した。しかし、この事例も近世の遺構からの出土であり、具体的な年代は知れない。課題を多く残しているが、筑後市およびその周辺域に初期の瓦を使用する何かが存在していたことはほぼ確実になったと言えるだろう。

上村英士「筑後東部地区遺跡群VI」（筑後市文化財調査報告書第36集）2001　筑後市教育委員会

別表　出土遺物一覧表

若菜稲ノ本遺跡

S-番号	遺構番号	遺恵器	土師器	瓦類	磁器	陶器	石製品	その他	備考（時期など）
S-1 I 層	1SD001 I 層	片、東播系鉢片（1）	須恵器3－8c、坏片、壷片、大型容器片	桃c、桃片、瓦質土器、火舎片（2）、羽釜（1）	白磁梅ケ（2）、白磁梅瓶ｴｎ3（1）、白磁梅ｹ-2/ヘラ（2）、青磁稜線1（1）、染付碗（4）、染付皿（2）、染付（9）、青磁片（1）	灰釉皿？（1）、片（10）	滑石碗片（1） 硬？片（1）	骨片（1）	近世～
S-1 II 層	1SD001 II 層		小皿片ノイト	桃c片	青磁片（1）	国産陶片（1）		木炭片	近世～
S-1 III 層	1SD001 III 層		片	桃c（造り良いが、原料甚しく気質できるものクシ）	白磁梅ケ-4-a（1）			黒曜石片（1）	中世
S-1 V 層	1SD001 V 層		片					頁石片	中世
S-1 V 層	1SD001 V 層			桃c					中世
S-2	1SK002		把手（1）						
S-3	1SP003		壷片		国産磁片（1）			鉄釘？片（1）	近世～
S-4	1SX004				磁片（1）、染片（1）				近世～
S-6	1SX006		片						
表土		坏片	片	瓦質火舎（1）	白磁梅ケ-1（1）、白磁梅ケ-4-a（1）、白磁梅ケ-4（1）、青磁梅瓶1-1-b（1）、青磁梅瓶1-b（1）、染片（7）、色付皿（1）、磁（1）	国産陶片（9）			
カクラン		壷片	片、高坏脚片		染片（9）、磁片（2）	国産陶片（1）		平瓦（1）	
表採（周辺表採）		片、東播系鉢片（1）	桃c、瓦質火舎片（1）	白磁小梅片（1）、染片（5）	国産陶片（5）、国産陶器片（3）			博多人形「美人もの」（1）	近世～

若菜大堀遺跡　第1次調査

S-番号	遺構番号	遺恵器	土師器	瓦類	磁器	陶器	製品	その他	備考（時期など）
S-1	1SD001	壷片	大型容器片	片、瓦質棒状製品	プリント唐草-近代、白付梅唐草-近代、染付梅唐草-近代～、染付梅死、染付小梅、白磁蛇ｴ、白磁蛇ｴ2片、白磁蛇-近世、白磁片-中世、色磁蛇片	唐様・唐様・梅-近代～、唐様・梅様～-近世、唐様・鉄様～-近世、唐様・鉄様-近代～、鉄釉片-近代～		土人形片-近代、瓦片-近代、線ブラスチック製、ガラス片-近代、瓦片-近代～、鉄釉片-近代～	鉄釉片の不明品だがセビ付は唐代？が他の片に同じ/近世～、近代
S-2	1SD002	東播系鉢、壷片	片、大型容器底部片		青磁蓮弁片-中世～、染付小梅片-近世～近代、染付馬付皿-近世、青磁？花-近代～	唐様・近世～、唐津焼梅、片、大型片-近代		木炭片、平瓦片	近世～
S-2 I 層	1SD002層		片、大型容器片、鍋？片、七輪中敷き	瓦質鉢？-中世、桃c片	青磁蓮？-中世末、白磁片-中世、染付小梅、青磁小梅片、白磁梅ｹ、白磁片、白磁梅片、同青磁稜1片、白磁稜皿	片-近世～、唐様片-～近代、唐片、鉄片、鉄片		瓦片、ロウ石、鉄釉片、丸瓦-近世～、土人形片？	近世～、近代
S-2 II 層	1SD002 II 層	壷片	片、坏片、大型容器片	瓦質火舎片、瓦質鉢	色絵小梅-近世、色絵小梅-近代、染付皿-梅片-近世、染付梅-近世～、染付大皿、染付片、白磁蛇皿-近世、白磁梅ｹ、白磁蛇ｴ、白磁ｴ、白磁片-近世～、同青磁梅1片	唐代-近世～、唐様・梅様・鉄片・唐様・唐代-近世～近代（近代代表品）	銅キセル？	桃瓦片？-新しい、丸瓦片-平瓦片-近世、瓦片-近世～、鉄釘・鉄板片-新しい、ガラス瓶（ワイン瓶）	（近代は新しいものがまく入っている＞カクラン）とあるのが、近世～だが、新しそう（近世～、近代～現代）
S-2 II 層	1SD002 II 層		片			小梅-近世～			
S-2 II 層	1SD002 III 層		片、鉢、		染付小梅/ロハゲ-近世、染付小梅、染付皿片-近世～、染付片、白磁片-中世～、青磁稜-近世、青磁梅-近世	唐代-中世～、常滑焼壷片、唐様-近世～、唐津焼？小梅片		土人形片-近世～	近世～
S-2 IV 層	1SD002 IV 層		土師質鉢-中世	片	梅？-近世～、染付皿、	唐-中世～（輸入？）		鉄土器？	近世～
カクラン		壷、壷片	大型容器片、大型鉢片、坏片-中世	瓦質鉢片	白磁片、白磁皿ｴ、白磁片-中世、青磁片-近代～、染付片、染付皿、小梅、染付梅-近代～現代	唐代、唐代-中世（輸入、小片）、瓦片-現代、唐片-近世～近世～		瓦片-近世～、線「五円」玉（穴アキ、年不明）平瓦-現代、桃瓦-近-現代、現状鉄釉-近-現代、鉄釉-現代	
表土		壷c片	片、大型容器片、鍋？片、七輪中敷き、小皿ｴイト、羽釜？	青磁坏底、青磁蓮-近代～、色絵小梅-近代～、白付梅-近世～、染付梅、染付皿-近世～、染付片、染付皿染み、青磁稜梅1、白磁蛇？-中世、白磁梅-現代？、白磁蛇-近代～、白磁梅-近-現代、クリーム容器（化粧品用）-現代	唐-青磁-近代～、梅様-近代～、常滑壷？片、唐-近世		桃瓦-近-現代、平瓦-桃瓦-現代のもの、平丸瓦-近代～現代	（表土）（表採）とあるが、現代のもの、平丸瓦-近代～現代
深堀			片、大型容器片		小梅-近世～、梅片-梅、染付片-近世～、色絵蛇ｴ-近代～	唐代-近世～			

若菜大堀遺跡　第2次調査

S-番号	遺構番号	遺恵器	土師器	瓦類	磁器	陶器	製品	その他	備考（時期など）
SD-01	2SD001	壷片	大型容器片	瓦質鉢片、桃片	染付皿・梅様・唐様-近-現代、白磁梅様、唐、同青磁皿1-中世	唐様、唐様-近代～、唐津皿		桃瓦-近-現代	新しい
表土					染付片-近代～			銭「十銭」（昭和16年）	

※同青磁＝同系青磁、同青磁＝同定系青磁を指す。

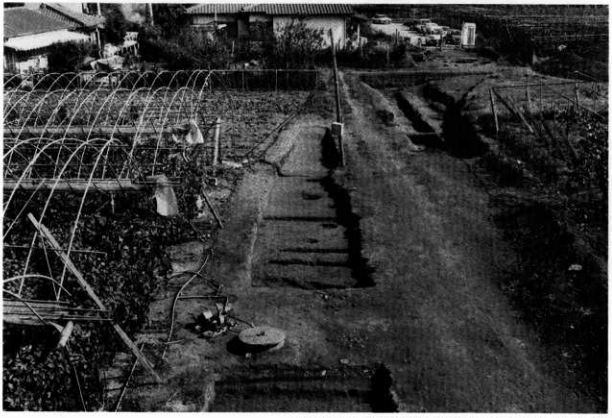
写真図版

（凡例）
遺物写真の右下に記す番号は、
Fig.番号ー遺物番号
と理解されたい。

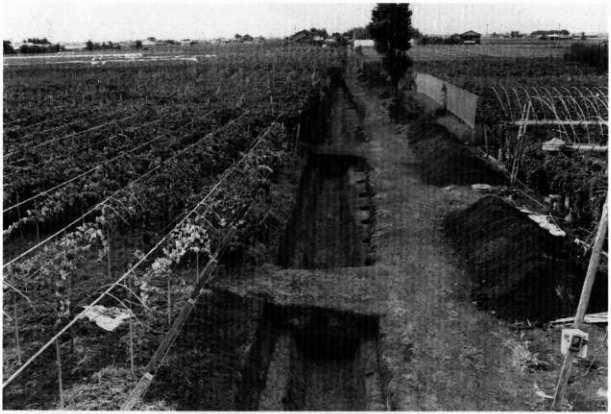
若菜鞘ノ本遺跡第1次調査N1・2トレンチ（東から）

若菜鞘ノ本遺跡第1次調査N3トレンチほか（西から）

若葉鞘ノ本遺跡第1次調査N4トレンチほか（東から）



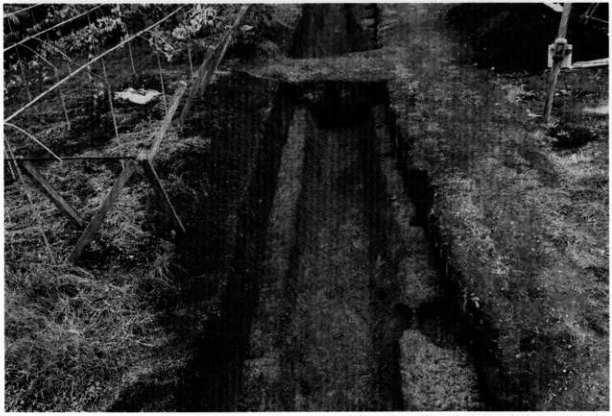
若葉鞘ノ本遺跡第1次調査N5トレンチほか（西から）



若菜鞘ノ本遺跡第1次調査S1・2トレンチ（東から）

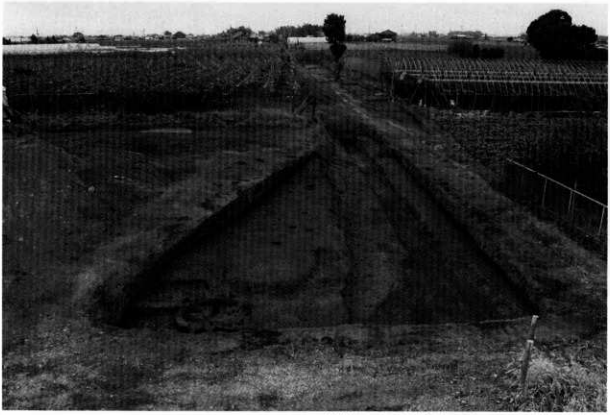
若菜鞘ノ本遺跡第1次調査S1トレンチ（西から）

若菜鞘ノ本遺跡第1次調査S2トレンチ（西から）



若菜鞘ノ本遺跡第1次調査S3トレンチ（東から）

若菜鞘ノ本遺跡第1次調査S3トレンチ（西から）



若菜鞘ノ本遺跡第1次調査S3トレンチ（東から）

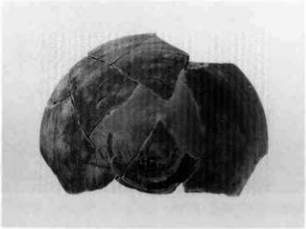
若菜鞘ノ本遺跡第1次調査S4トレンチ（西から）

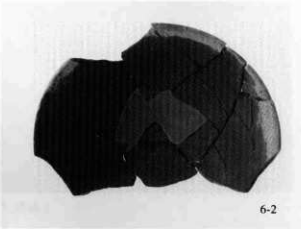
若菜鞘ノ本遺跡第1次調査S4トレンチ（東から）

若菜鞘ノ本遺跡第1次調査1SK005全景及び土層観察（南から）

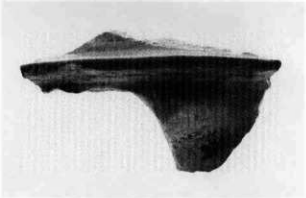
若菜鞘ノ本遺跡第1次調査1SD001土層観察（西から）

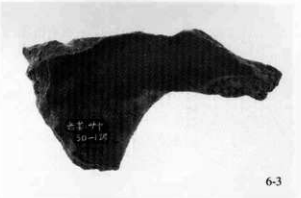
6-1





6-2

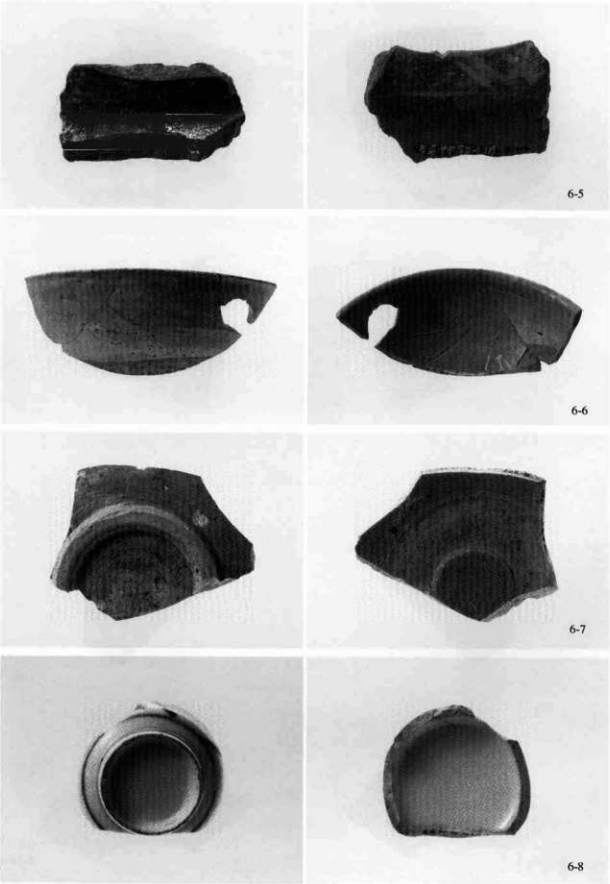




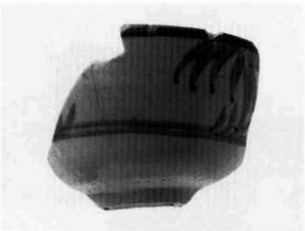
6-3

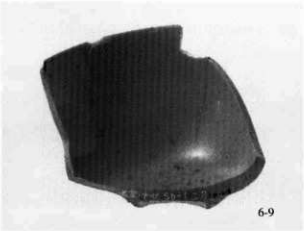
6-4

若菜鞆ノ本遺跡1SD001出土遺物

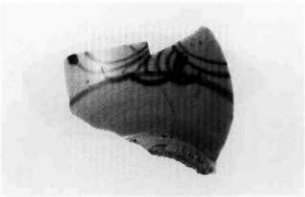


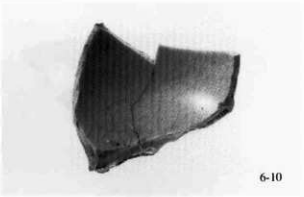
若菜鞘ノ本遺跡1SD001出土遺物



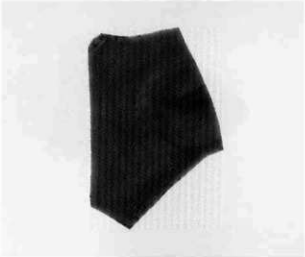


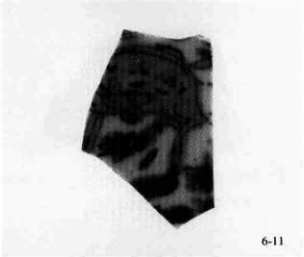
6-9



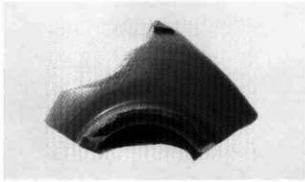


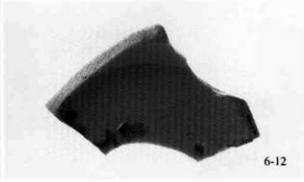
6-10





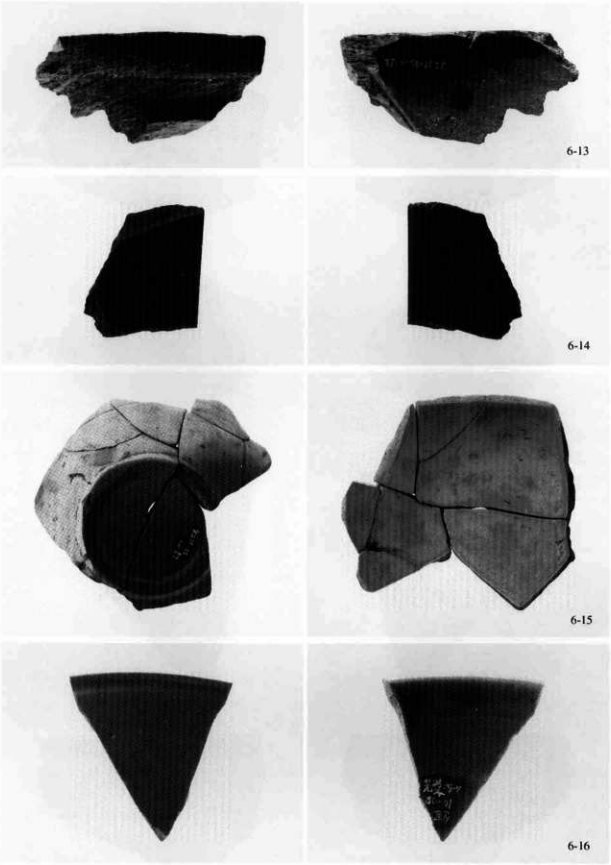
6-11



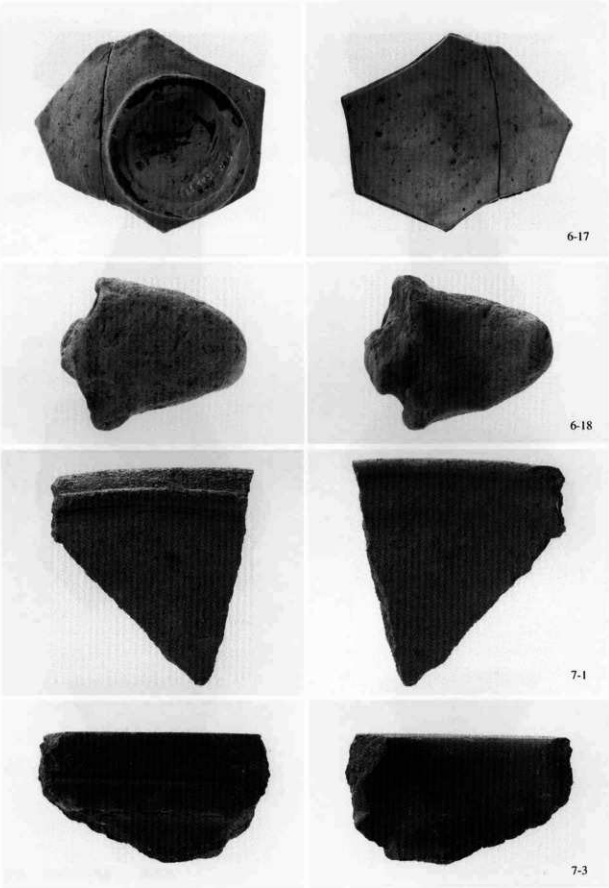


6-12

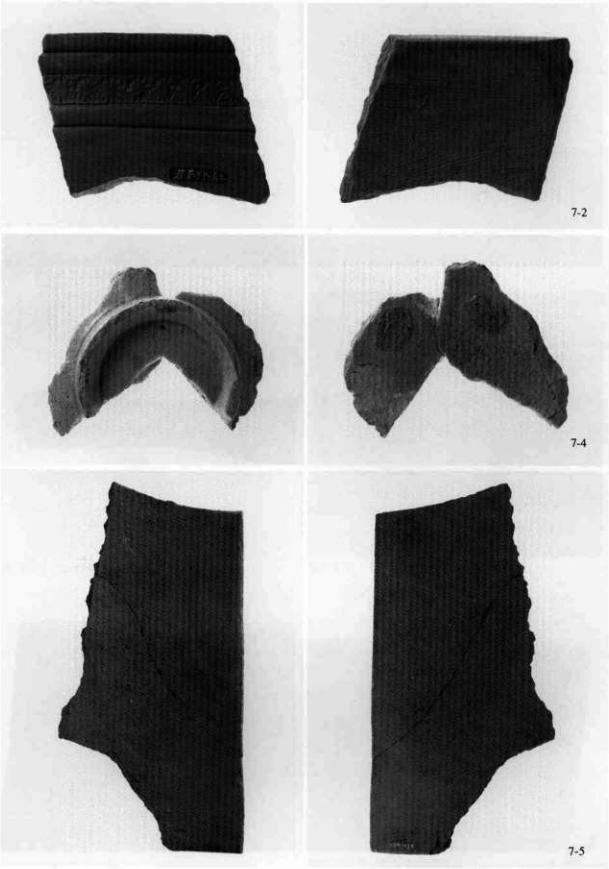
若菜輔ノ本遺跡1SD001出土遺物



若菜鞘ノ本遺跡1SD001出土遺物

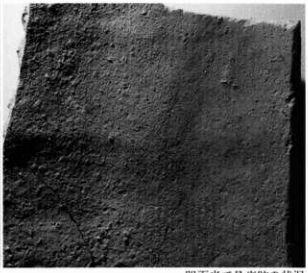


若菜鞘ノ本遺跡1SD001・1SK002・表土出土遺物

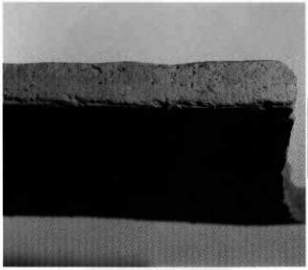


若菜鞘ノ本遺跡表土出土遺物

凸面叩きの状況



凹面当て具痕跡の状況



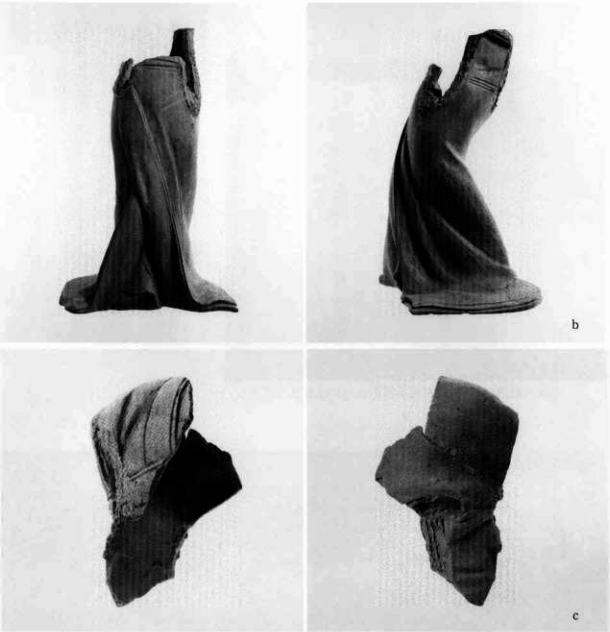
側面分割面の状況（資料中程・下が凸面）

側面分割面の状況（広端部付近・上が凸面）

分割裁線の状況（左が広端部）

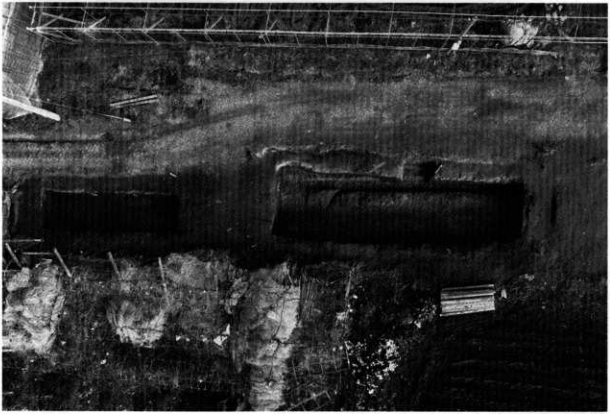
分割線の状況（狭端部近く）

若葉鞘ノ本遺跡表土出土瓦細部観察



若葉鞘ノ本遺跡表土出土遺物

若葉大堀遺跡第1次調査西半部全景（空中写真・東から）

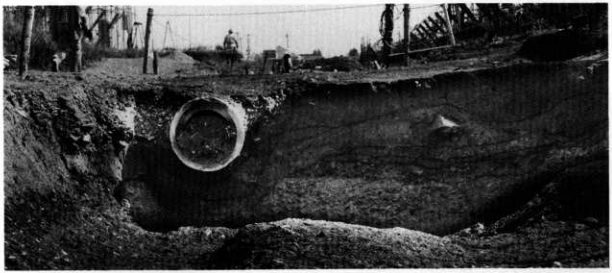


若葉大堀遺跡第1次調査西半部全景（空中写真・上が北）

若葉大堀遺跡第1次調査東半部全景（空中写真・東から）

若葉大堀遺跡第1次調査東半部全景（空中写真・上が北）

若菜大堀遺跡第1次調査1SD001土層観察B-1地点（東から）

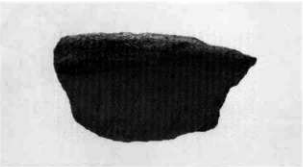


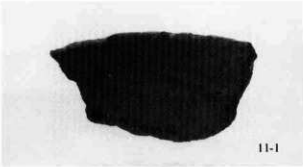
若菜大堀遺跡第1次調査1SD001土層観察B-5地点（西から）

若菜大堀遺跡第1次調査1SD001土層観察C-1地点（東から）

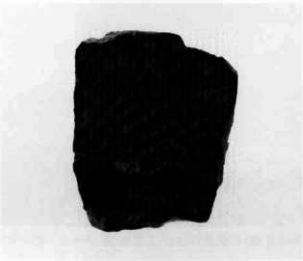
若葉大堀遺跡第1次調査1SD001土層観察C-5地点（西から）

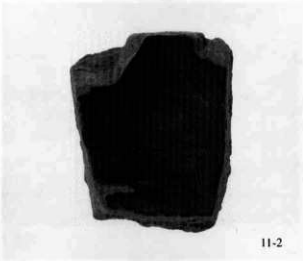
若葉大堀遺跡第1次調査1SD001土層観察D-6地点（西から）



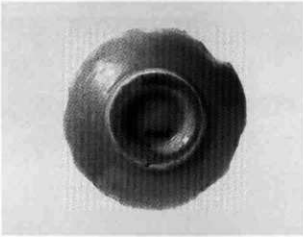


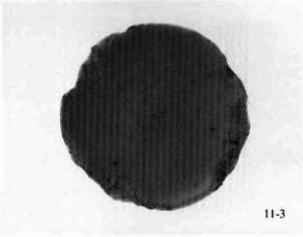
11-1



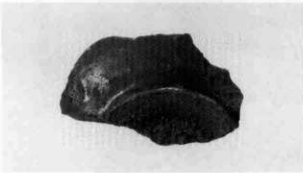


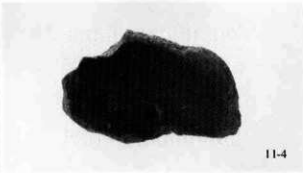
11-2





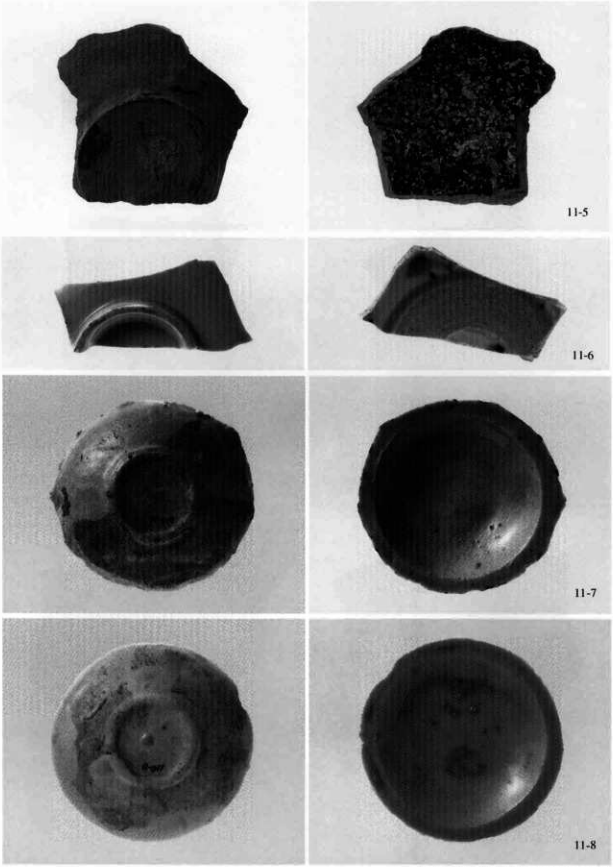
11-3



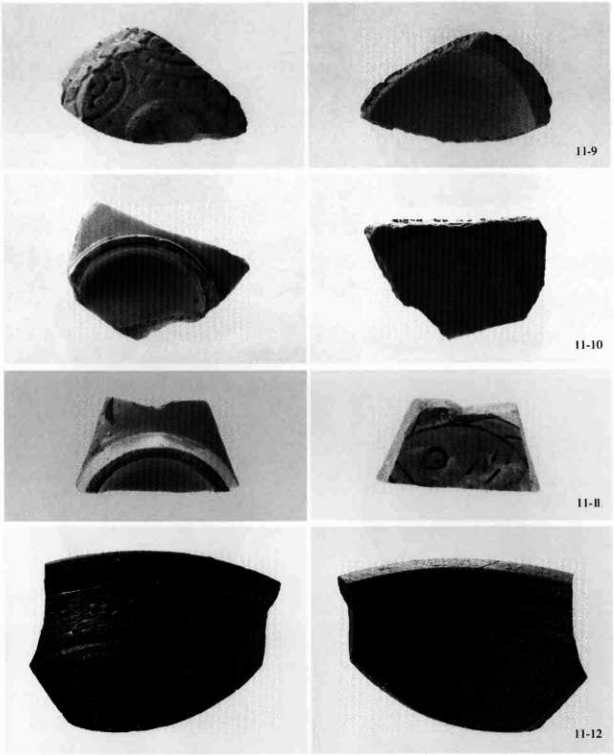


11-4

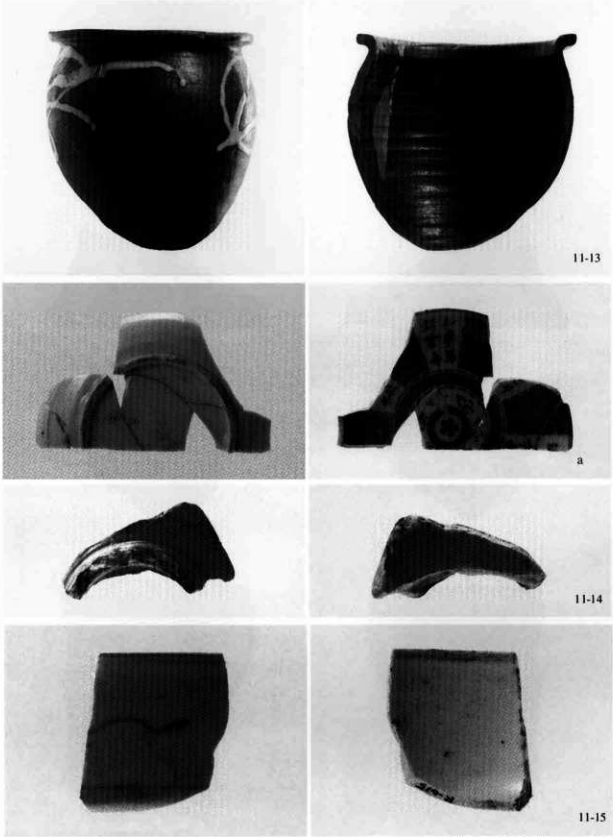
若菜大堀遺跡第1次調査出土遺物



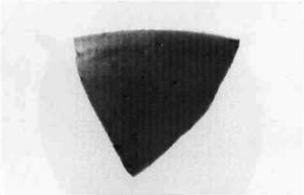
若菜大堀遺跡第1次調査出土遺物

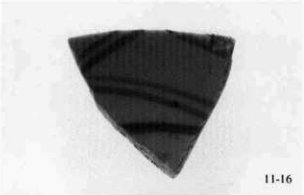


若菜大堀遺跡第1次調査出土遺物

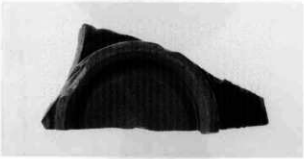


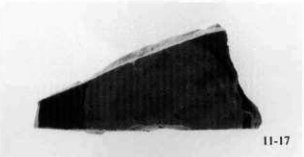
若菜大堀遺跡第1次調査出土遺物



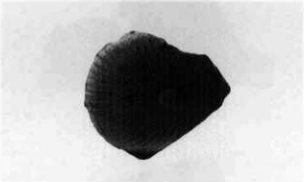


11-16

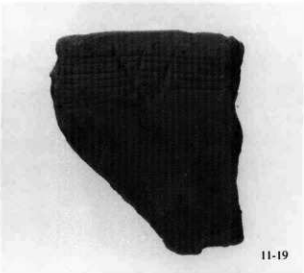




11-17

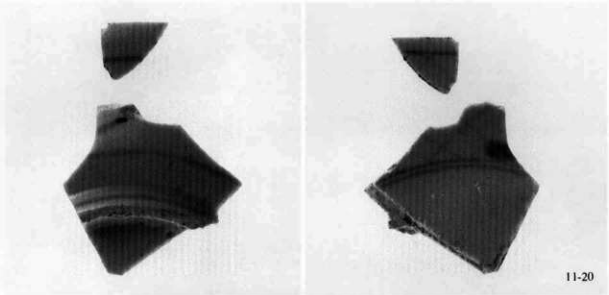


11-18

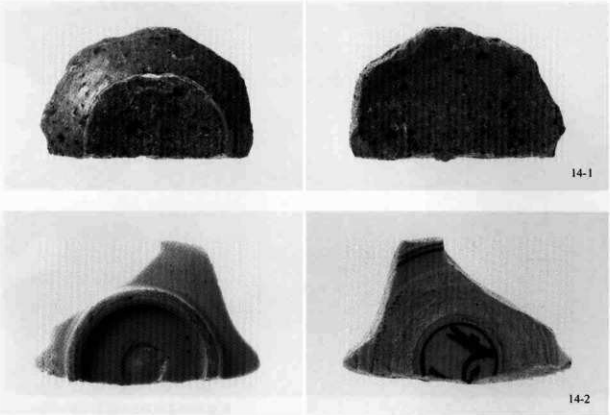


11-19

若菜大堀遺跡第1次調査出土遺物



若菜大堀遺跡第1次調査出土遺物



若菜大堀遺跡第2次調査出土遺物

若葉大堀遺跡第2次調査全景（東から）

若葉大堀遺跡第2次調査全景（西から）

追記：本文中に報告した平瓦に関して

納品完了後、鶴田西牛ヶ池遺跡の他に今次の出土瓦と近似する資料が、前津柳ノ内遺跡で出土していることと合わせて、筑後市内に水田(みずた)焼という近世・近代に操業していた窯の存在を知らされた。

まず類似する瓦の状況だが、いずれも近世の遺構から出土し、特に前津柳ノ内遺跡の事例は、切断方法をはじめ胎土や厚さ、色調などの点で類似する要素が多いものの、破断面のシャープさや摩滅の少なさ等、見るからに新しい遺物と思えるものも含まれている。

ところで、水田焼をここで問題視するのは以下の理由による。

水田焼とは、近世に成立した土鍋の製作を中心とする窯で、一時期（具体的にいつ頃かは判明しない）に瓦を製作していたことが分かっている。その製品は伝存せず、いかなる製品であったかは判明しないが、その伝統を引く窯元が製作する土管の胎土、色調はここに報告した瓦と近似し、この水田焼自体がこうした色合いの製品を作ることで著名であったらしい（赤瓦の異名も知られている）。

市の聞き取り調査の結果では、残念ながら瓦製作に関わる記録や道具の一切が失われており、具体的な製品の特定は現段階ではできていないという。しかしながら、当該資料が水田焼である可能性を完全に否定する要素もなく、ここに追記としてこの報告書を引用される方々に注意を喚起することとした。

ただ、この資料が、近世・近代の製作であることが確実になったとしても、土器作り工人が実際に瓦を一般の需要に応じて製作したのであり、伝統ある瓦職人が製作しなかった瓦とはどういうものかを物語る重要な証人となろう。つまり、筑前地域にみられる初期瓦の多くは土器作り職人が製作したと考えられるものであり、その部分での共通性は初期の瓦を考える上で間接的な参考事例になるであろう。

具体的な解明は今後の調査・研究に委ねなければならないが、初期瓦として当該資料を引用することには慎重を期していただきたいことを付記しておく。

（編者記）

筑後市内遺跡群V

筑後市文化財調査報告書　第52集

平成15（2003）年3月

発行　筑後市教育委員会

編集　（財）元興寺文化財研究所

印刷　明新印刷株式会社